



# 東京芸術祭2022 芸劇オータムセレクション

Tokyo Festival 2022 TMT Autumn Selection

## グロテスクも美に反転する プルカレーテの世界

欲望に駆り立てられた野性的な人間たちによって脈打つ、  
シルヴィウ・プルカレーテの舞台。  
演出の魅力、新作「守銭奴」について主演の佐々木蔵之介に聞く。

2017年、ルーマニアの鬼オシルヴィウ・プルカレーテ(演出)×佐々木蔵之介(主演)で上演された「リチャード三世」は、ひと時も目が離せない鮮烈な舞台として脳裏に焼き付いている。5年前、筆者はパンフレット編集のために幾度か稽古場を訪れたが、演出家が次々と提案する驚きのアイデア、テキストにとらわれない自由な解釈と、日々のクリエイション現場も刺激的で心躍る面白さだった。猥雑でエロティック、残酷な悪夢は時にまばゆく、そこはかたなくユーモアも漂う。舞台は次第に多面的となり、中世

の戦場を描いたシェイクスピアの古典が、時にどの集団/社会にも起こりうる血なまぐさい恐怖となって迫る。とりわけユニークだったのは、孤独で嫌われ者のイメージが強いリチャード三世を「太陽のように陽気な人間で、道化を演じる人物」ととらえたことだ。タイトルロールを演じた佐々木も「その角度からくるのか!と自分が想定していた斜め上からくる演出、それがとても楽しかった」と振り返る。「役者たちが“ごっこ遊び”をするように、遊んでふざけていると思ったら『え、殺しちゃった

の!?!』といった事件が起こり続ける。あくまでリチャードは猫背で醜い“演技”をしているだけで、周囲を騙すための策略として奇形を演じている男だとおっしゃっていました。つくっては壊し、つくっては壊しを繰り返しながら、想像もしなかった面白いことを成立させていく斬新なアイデアに感嘆し、毎日が新鮮な稽古でした」

そして今秋、再びこのタッグでの新作が生まれる。作品は、モリエールの古典喜劇「守銭奴」だ。佐々木が演じるのは、家族や召使にも横暴なほど極度の儉約を強要する、強烈な個性を持つ男アルバゴン。

「権威も財産もあるのに、ため込むだけで決して必要なものに金を使わず、子どもたちには一文も渡さない。しかも新しいものを生み出さず、ただ守るだけで、父親の権力をかさに息子たちの結婚にまで口を出す。さらに金に固執するだけではなく、他人からの見え方を気にするプライドまであって……つまり、どうしようもない男ですね。お客さまに『こんな老人イヤだな』と感じていただければ(笑)。まあでもこの振り切れ方は、演劇として絶対面白くなるはずですよ。『リチャード三世』も悲劇であり喜劇でしたが、プルカレーテさんの手にかかると、グロテスクで汚いものも美しく変化する。『守銭奴』も一人の男の物語を、アッと驚く方法で演出してくれるでしょう」

猜疑心にとらわれ、清々しいほどに“ケチ”なアルバゴン。今回も笑いながら震えつつ、うっとりするほどに甘美で強烈なプルカレーテの世界に飛び込むことにしよう。

取材・文：川添史子(編集者・ライター)

### 「守銭奴 ザ・マネー・クレイジー」

11月23日(水)～12月11日(日) プレイハウス 詳細はP10, P12へ

作:モリエール 翻訳:秋山伸子 演出:シルヴィウ・プルカレーテ  
出演:佐々木蔵之介/加治将樹 竹内将人 大西礼芳 天野はな/  
茂手木桜子 菊池銀河/長谷川朝晴 阿南健治 手塚とおる 壤晴彦  
宮城、大阪、高知公演あり

プルカレーテFES 特設サイト: <https://www.purcarete-fes.jp/>



© Michèle Laurent



© Michèle Laurent



© Jan Versweyeld



© Jacques Grison



© Jan Versweyeld

「WORLD BEST PLAY VIEWING ワールド・ベスト・プレイ・ビューイング」演劇から映像へ。至高の映像スペクタクルに浸る5日間。

10月5日(水)～9日(日) シアターイースト 詳細はP8へ

テアトル・デュ・ソレイユ(太陽劇団)

『最後のキャラバンサライ (オデュッセイア)』 (2006年)

※フランス語上映・日本語字幕付き

10/5(水) 11:00 10/8(土) 16:30

監督:アリアーヌ・ムヌーシュキン

作・出演:テアトル・デュ・ソレイユ(太陽劇団)

上映時間:4時間50分(休憩あり) 写真 1

『モリエール』(1978年フランス・イタリア 合作映画/2022年4Kデジタルリマスター版)

※フランス語上映・日本語字幕付き

10/6(木) 11:00 10/8(土) 10:15

監督・脚本:アリアーヌ・ムヌーシュキン

出演:フィリップ・コーペール、ジョゼフィーヌ・ドレンヌ、ブリジット・カティオンほか

上映時間:4時間25分(休憩あり) 写真 2

インターナショナル・シアター・アムステルダム(ITA)

『ローマ悲劇』(2021年)

※オランダ語上映・日本語字幕付き ※中学生以上推奨

10/7(金) 11:00 10/9(日) 11:00

原作:ウィリアム・シェイクスピア

演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ

出演:インターナショナル・シアター・アムステルダム(ITA)

上映時間:5時間40分(休憩あり) 写真 3

## プルカレーテと鶴屋南北の 時空を超えた出会い

四代目鶴屋南北『桜姫東文章』を原作とした、プルカレーテの脚本・演出による作品「スカーレット・プリンセス」が、待望の来日を果たす。ルーマニア人キャストが演じ、歌舞伎のエッセンスに忠実でありながらも、全く新しい「本歌取り」の演劇作品だ。2018年のルーマニア・シビウ国際演劇祭でのワールド・プレミアに続き、2019年12月にはベルギーのブリュッセルに招かれて、絶賛を集めた。今回、満を持してのアジア初上演となる。

プルカレーテ演出の特徴である大胆で挑戦

© Ovidiu Matiu



的なスペクタクルは、まさしく日本の「傾く」という精神に通じるもの。また、テキストの深い読解、日本文化へのリスペクトと豊かな知識に基づいた細やかなアプローチが、この作品を唯一無二なものにしている。「スカーレット・プリンセス」は、日本とルーマニアが舞台芸術において親密な交流を重ねるなかで誕生した。シビウ国際演劇祭では、2008年に故・十八代目中村勘三郎が平成中村座を率いて歌舞伎の「夏祭浪花鑑」を上演。以降も、串田和美が「テンペスト」、野村萬斎が「国盗人」などの作品を発表し、野村秀樹が「One Green Bottle」を上演するなど、深いつながりを築いてきた。

プルカレーテによって新たな光を当てられた「歌舞伎」が、世界の人々の目にどう映るのか。歌舞伎の新たな一面に気づかされ、日本の演劇が持つ底力を再発見する機会になるに違いない。



Silviu Purcarete



© 鈴木竜一朗



© 雨宮透貴



© Kenji Kagawa

「となり街の知らない踊り子」  
言葉×身体 2015年の初演以来、  
再演を重ねる傑作。

11月4日(金)～6日(日)  
シアターイースト 詳細はP10へ

作・演出・振付:山本卓卓(範宙遊泳)  
振付・出演:北尾亘(Baobab)

東京芸術祭2022:  
<https://tokyo-festival.jp/2022/>

## ルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場 「スカーレット・プリンセス」The Scarlet Princess

※ルーマニア語上演/日本語・英語字幕あり

10月8日(土)～11日(火) \*10日(日)無休 プレイハウス 詳細はP8へ

上演台本・演出:シルヴィウ・プルカレーテ 原作:鶴屋南北『桜姫東文章』  
出演:オフェリア・ポビ ユスティニアン・トゥルク ルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場カンパニー

プルカレーテFES 特設サイト: <https://www.purcarete-fes.jp/>

